

二〇一三年度秋季企画展

「大正デモクラシー」期の早稲田

高橋 央

二〇一三年は一九一三年に早稲田大学が創立三十年祝典を挙行し、大隈重信総長が学問の独立、学問の活用、模範国民の造就をうたう早稲田大学教旨を宣言してから一〇〇年にあたる。本展示ではそれを踏まえ、この教旨制定の一九一三年から一九二〇年代にかけての時期を「大正デモクラシー」の時期ととらえ、この時期の早稲田大学の歴史を大学側、また教員学生の動向から再考する展示を行った。また当時の象徴的な事件として、早稲田騒動と軍事研究団事件をとりあげた。

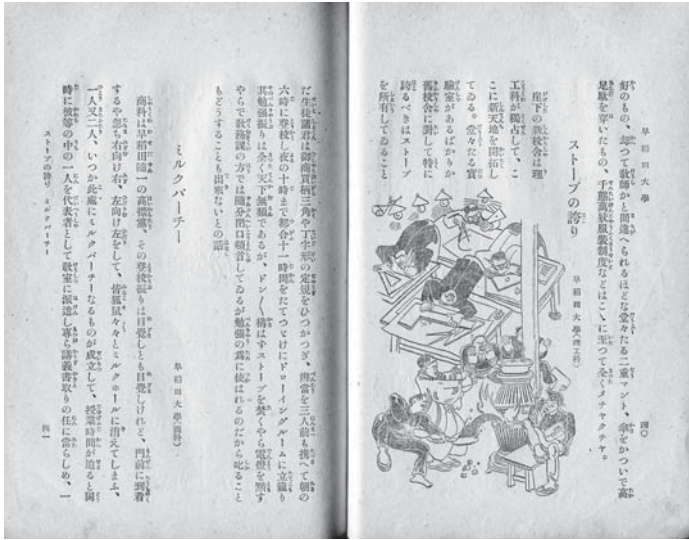
会期は二〇一三年十月八日から十一月四日まで、会場は早稲田大学大隈記念タワー一〇階の二二五記念室であった。展示資料については早稲田大学図書館、国立公文書館、朝日新聞社の御協力を得た。あらためて深謝申し上げる。本展示においては企画・図録作成を高橋央が担当した。



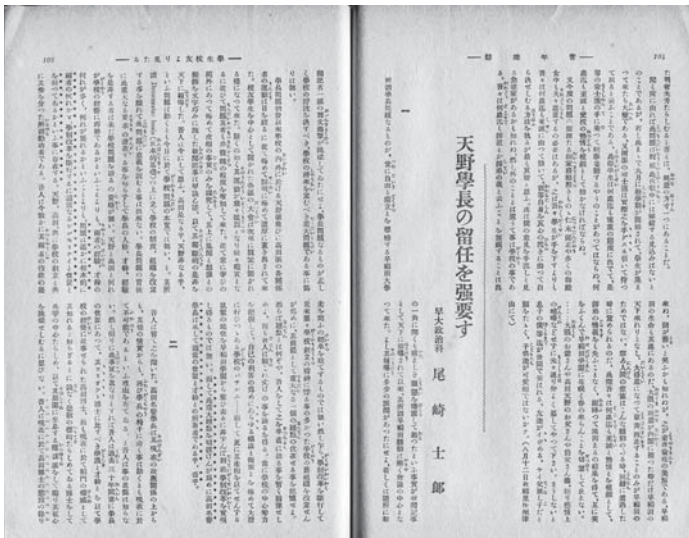
2013年度秋季企画展ポスター



創立30年祝典で演説中の大隈重信総長。早稲田大学史資料センター所蔵



近藤浩一路『校風漫画』より「ストーブの誇り」(博文館、1917年)。
早稲田大学大学史資料センター所蔵



尾崎士郎「天野學長の留任を強要す」『青年雄弁』1917年9月号。
早稲田大学大学史資料センター所蔵

1、教旨制定と大学令による大学へ

一九一三（大正二）年一〇月十七日、早稲田大学は創立三十年祝典を挙行し、大隈重信総長は学問の独立、学問の活用、模範国民の造就をうたう早稲田大学教旨を宣言した。教旨は第二次世界大戦後、「立憲帝国の忠良なる臣民として」の字句を削除したが、今日まで早稲田大学の基本精神を示すものとして存続している。教旨の碑は一九三七（昭和二）年に建立され、今、早稲田大学正門脇にある（字句は大正期の制定当時のまま）

当時の早稲田大学は専門学校令の適用を受ける学校であったが、大学令による大学に昇格すべく、大隈、高田を始め大学関係者は準備に奔走した。一九二〇（大正九）年二月五日、早稲田大学は大学令による大学として認可された。早稲田大学は政治経済学部、法学部、文学部、商学部、理工学部の五学部体制となり、専門部と高等師範部を併置した。従来の高等予科は高等学院に改組された。

一九二二（大正一一）年一月一〇日、大隈重信総長が逝去し、盛大な国民葬が挙行された。総長には塩沢昌貞を経て高田早苗が就任し、大隈没後の大学経営を担った。そして故大隈総長を記念する事業として、大隈記念講堂の建設が開始され、一九二七（昭和二）年に竣工した。

【展示資料】

『早稲田学報』一九二三年十一月号（祝典記念号）

早稲田大学図書館所蔵

三十年祝典の記念号。式典における高田学長の挨拶、渋沢栄一基金管理委員長の報告、大隈総長による早稲田大学教旨の宣言、国内外からの祝辞、また記念園遊会や提灯行列の実施といった関連行事の開催が詳細に報じられている。

高田早苗『半峯昔ばなし』早稲田大学出版部 一九二七年

早稲田大学大学史資料センター所蔵

高田早苗による回顧録。早稲田大学教旨の作成が高田の発案であり、坪内逍遙、天野為之、市島謙吉、浮田和民、松平康国等と案文を作成し、大隈総長の閲覧を経て、宣言に至った経緯が述べられている。また三十年祝典の実施、校旗・制服の制定を行ったことが述べられている。

『早稲田大学創立三十年祝典記念帖』早稲田大学出版部 一九二三年

早稲田大学大学史資料センター所蔵

三十年祝典を記念して作られた写真帖。式典の様子、関連行事の写真が豊富に掲載されている。

『早稲田大学ヲ大学令ニ依リ設立スルノ件ヲ裁可セラル』『公文類聚』第四四編卷二四
 国立公文書館所蔵 ※パネル展示

一九二〇（大正九）年一月二十三日付。原敬内閣の文部大臣中橋徳五郎による早稲田大学の認可申請上奏公文。翌二月早稲田大学は大学令による大学として認可された。

『早稲田学報』一九二〇年五月号

早稲田大学大学史資料センター所蔵

高等学院開院式に関する記事がある。高等学院長中島半次郎が学科編成に柔軟性を持たせるべく「高等学院」と命名したことを説明している。また従来の高等予科以上に高等普通教育を充実させ、大学の基礎教育を授けるという高等学院設立の趣旨を述べている。高等学院は文科四四〇人、理科一六〇人の一学年六〇〇人の体制でスタートした。倍率は文科が約三倍、理科が約六倍であったという。開院式には大隈重信総長、平沼淑郎学長、松浦鎮次郎文部省専門学務局長が祝辞を述べ、来賓として後藤新平等が臨席した。

酒枝義旗『早稲田の森―生ける母校の姿―思い出』前野書店 一九六六年

早稲田大学大学史資料センター所蔵

酒枝は早稲田高等学院の第一期生。後に政治経済学部教授となる。本書で創設当時の高等学院、また大正期の政治経済学部に関する貴重な証言をのこした。院長中島半次郎、クラスメイトのこと、大正期の戸山の風景、吉野作造の講演を聞いた思い出等が記されている。

時子山常三郎『早稲田生活半世紀』早稲田大学出版部 一九七三年

早稲田大学大学史資料センター所蔵

後に第九代早稲田大学総長となる時子山常三郎は一九二二年当時高等学院生。本書で大隈の国民葬に関する貴重な証言を残している。

『早稲田大学故大隈総長記念大講堂競技設計図集』早稲田大学故大隈総長記念事業部編 一九二三年

早稲田大学大学史資料センター所蔵

故大隈総長の記念事業として大隈講堂を建設した際の設計図案集。一等から三等、また佳作一席から六席までの入選図案が掲載されている。今日の大隈講堂の形が決定するまでに多くの図案と可能性があったことを示す貴重な資料である。

『早稲田学報』一九二二年四月号（故総長大隈侯追悼号）

『大観』一九二二年二月号（大隈侯哀悼号）

早稲田大学大学史資料センター所蔵

一九二二（大正一一）年一月一〇日の大隈総長逝去を受けた『早稲田学報』と『大観』の追悼記念号。『大観』は大隈発刊の総合雑誌として一九一八（大正七）年五月に創刊。追悼号には三宅雪嶺、徳富蘇峰等が寄稿した。

2、「大正デモクラシー」期の教員学生と早稲田の街

一九一〇年代から一九二〇年代にかけての早稲田大学は、個性あふれる教員と学生がキャンパスに集った時代であった。政治経済学部 of 安部磯雄・大山郁夫教授は当時の代表的教員であり、学内の講義のみならずメディアにおける言論活動を通して「大正デモクラシー」期の政治思想の一翼を担った。ここでは彼等の講義ノート、また受講生のノートから、安部・大山の授業光景の再現を試みた。また『人生劇場』の著者として有名な尾崎士郎は当時大学部政治経済学科の学生であり、尾崎の回顧から当時の早稲田大学生の生活をかいまみた。さらに卒業アルバムの写真からも、当時の学生生活の再現を試みた。

この時期はキャンパスと学生街の整備が着々と進んだ。現在の早稲田キャンパスには五学部と高等師範部、第二高等学院、現在の戸山キャンパスの敷地には第一高等学院があり、建物の整備が進んだ（高等学院は一九二一（大正一〇）年第一、第二高等学院に再編された）。新図書館（現二号館）、演劇博物館、大隈講堂といった、現在も早稲田の誇りと言ふべき施設が着々と建設されたのもこの時期である。そして大学正門前の鶴巻町（現在の早稲田鶴巻町）に学生街が本格的に形成されるのもこの時期である。下宿屋を始め飲食店、喫茶店、古本屋等が集まり一大学生街が形成された。

この時期の早稲田を襲った災害として、一九二三（大正一二）年九月一日の関東大震災がある。本郷の東京帝国大学が受けたような図書館焼失という事態は免れたが、それでも大講堂の倒壊、応用化学教室の全焼という大きな被害を受けた。ここでは写真と一学生がのこした「関東大震災写真帖」から、震災当時の状況の再現を試みた。

【展示資料】

「都市問題 農村問題」

「社会学 社会問題 国民科社会道德」（一九二〇年代）

早稲田大学大学史資料センター所蔵

安部磯雄が大正期の講義に使用した講義ノート。

「勝田友三郎氏受講ノート 国家原論・帝国憲法」

早稲田大学大学史資料センター所蔵

勝田友三郎による大山郁夫の『国家学原理』の受講ノート。一〇〇ページ以上に渡る詳細なものである。

コラム 吉野作造と早稲田

「大正デモクラシー」期の早稲田大学では専任の教授・講師のみならず、東大・京大等の大学からも科外講義の講師を招聘していた。ここではそのような講師陣から、吉野作造をとりあげてみたい。

『早稲田学報』一九一七（大正六）年一〇月号によれば、「最近支那革命史」の担当講師として吉野作造の名がある。しかし『吉野作造選集』第一四卷（岩波書店 一九九六年）所収の一九一七年一〇月三三日の日記（以下「吉野日記」と略称）には「夜内ヶ崎君を訪ひて早稲田講師辞退の理由を述べる」とある。日記には明記されていないが、おそらく当時の吉野が非常に多忙であった為、一年ないし半年の講義は困難だったのである。内ヶ崎は吉野の第二高等学校以来の親友で早稲田大学教授の内ヶ崎作三郎である。常勤の講師は辞退した吉野だが、内ヶ

崎や大山郁夫との交流があり、科外講師としての招聘には応じ、早稲田で講演している。

例えば一九一八（大正七）年十二月三日午後三時より、吉野は早稲田大学大講堂で「国際聯盟論」を講演している（『早稲田学報』一九一九（大正八）年一月号）。同日の「吉野日記」には、「政法学校にて講義を済まし直に早稲田にゆく 内ヶ崎君の仲介により科外講義を頼まれ居りしを以てなり 題は「国際聯盟に就て」、聴衆堂に溢れ非常の盛会なりし」とある。早稲田の学生が熱心に聴講した様が見て取れる。

他にも「吉野日記」によれば一九二二（大正一一）年五月十二日には「支那の近状」を、一九二三（大正一二）年二月一日には「羅馬法王問題」を、一九二四（大正一三）年一月七日には「支那問題」を科外講演している。一九二二年五月十二日の日記には早稲田の古本屋を訪問したこと、一九二四年一月七日の日記には大隈会館で夕食を饗されたことが記されている。吉野も広い意味における早稲田大学の教員であり、早稲田の学生も彼の教え子であった。

「建設者同盟綱領」「建設者」一九二二年十一月号

早稲田大学図書館所蔵※復刻版

『建設者』は建設者同盟の機関誌。巻末に綱領がのせられている。建設者同盟は和田巖・稲村隆一・浅沼稻次郎等早稲田大学の学生を中心に一九一九（大正八）年に結成された、学生思想団体。

近藤浩一路『校風漫画』博文館 一九一七年

早稲田大学大学史資料センター所蔵

画家・漫画家である近藤浩一路が当時の学生を描いた漫画集。当時の学生の生活がいきいきと表現されている。

絵葉書にみる「大正デモクラシー」期の早稲田大学

早稲田大学大学史資料センター所蔵

絵葉書にみる「大正デモクラシー」期の早稲田大学。正門、大講堂、図書館、政・法教室等各料教室、高等予科。

尾崎士郎『わが青春の町』河出書房新社 一九六三年

早稲田大学大学史資料センター所蔵

『人生劇場』で著名な小説家尾崎士郎の回顧。早稲田界限・鶴巻町についての思い出が記されている。

今和次郎「早稲田附近の各種飲食店―分布状態」『早稲田学報』一九二六年六月号

早稲田大学大学史資料センター所蔵

早稲田大学理工学部教授で考現学のパイオニアの今和次郎による一九二六（大正一五）年当時の早稲田周辺の飲食店調査。洋食店二六軒、カフェ七軒、喫茶店一六軒、ミルクホール七軒等大学周辺に一四五軒の飲食店があることが記されている。

今和次郎「早稲田附近の飲食店分布図」『早稲田学報』一九三二年一月号

早稲田大学大学史資料センター所蔵

一九三一（昭和六）年に調査された早稲田界隈の飲食店分布図。一九二六（大正一五）年当時にくらべ、カフェ・喫茶店・レストランが四九軒から八六軒に増えるなど学生街のにぎわいが増していることが確認できる。

『新版大東京案内』中央公論社 一九二九年

早稲田大学大学史資料センター所蔵

今和次郎編集による一九二九（昭和四）年当時の東京案内。早稲田大学は「官学に対抗する私学の雄」「東都学生界の覇者」と紹介されている。

「政治経済学科 卒業記念写真帖」一九一六年

早稲田大学大学史資料センター所蔵

卒業アルバムは大正期になるとほぼ全学科（学部）で作成されるようになる。各アルバムとも大隈総長、高田学長（後総長）、学科長（学部長）の写真、また授業の光景や教員、卒業生の写真を掲載している点では共通している。しかし内容は各学科（学部）毎に異なる構成となっている。政治経済学科のアルバムには詳細な目次があり、上述の内容に加え、冒頭に前島密筆の早稲田大学教旨や校歌があり、さらにサークル活動、大隈邸や早稲田界隈の写真等を含む豊富な内容のものとなっている。

「関東大震災写真帖」

早稲田大学大学史資料センター所蔵

関東大震災時早稲田大学理工学部建築学科に在籍していた一学生がのこした震災当時の写真と手記。

『早稲田学報』一九二三年一〇月号（大震災臨時号）

早稲田大学図書館所蔵

関東大震災直後の『早稲田学報』。大学における震災の概況、被害詳報、教職員・学生・校友の安否等が報じられている。震災の被害と混乱は小さいものではなかったが、一〇月一日より授業は再開された。

3、あるべき大学像をめぐる――早稲田騒動と軍事研究団事件――

明治期の建学の時代を経て、大正期に大学としての発展の歩みを続ける早稲田大学への愛着は、おそらく総長・学長・維持員といった経営陣、また教員・学生・校友が皆共有するものであつたらう。しかし早稲田大学がいかなる形で発展すべきかという問題、即ち将来あるべき早稲田大学の大学像は各人一様ではなく、時にそれは先鋭化した対立となることがあつた。一九一七（大正六）年の早稲田騒動、また一九二二（大正一一）年に起こつた軍事研究団事件は大学像の対立という側面を有する事件であつた。ここでは早稲田騒動における「高田派」と「天野派」の大学像、また軍事研究団事件において賛成派と反対派が示した大学像を見てみたい。

【展示資料】

『早大紛擾秘史』第二冊

早稲田大学図書館所蔵

早稲田騒動に関する市島謙吉（春城）の発言が記録されている。いわゆる「高田派」（高田前学長支持派）の見解を示す基本資料。六月十七日の高田邸の会合で市島が主張したのは、大学創業者・経営者として手腕があるとみなされた、高田早苗の学長復帰であった。

尾崎士郎「天野学長の留任を強要す」『青年雄弁』一九一七年九月号

早稲田大学大学史資料センター所蔵

「早大改革号」と題された本誌は早稲田騒動に対する教員・評議員・識者・学生等の意見を幅広く掲載している。当時政治経済学科に在籍していた尾崎士郎は「民本的基礎」のもとでの大学改革を主張、現任の天野学長の留任と、天野学長の下での改革を要求した。

石橋湛山「大正六年の早稲田騒動」『石橋湛山全集』第一五卷

早稲田大学大学史資料センター所蔵

騒動当時『東洋経済新報』にいた校友石橋湛山の騒動回顧録。石橋は「天野派」（天野学長支持派）として活動した。石橋の回顧によれば、「天野派」の主張は早稲田大学の「民本的」改革であった。

北沢新次郎・末川博・平野義太郎監修『大山郁夫伝』中央公論社 一九五六年

早稲田大学大学史資料センター所蔵

早稲田騒動当時教授であった大山郁夫の伝記。騒動当時の大山の行動が説明されている。大山は恩賜館に研究室を有し、大学改革を志向する「恩賜館組」の教授の一人であり、大学改革案を高田早苗前学長に提出し、大学当局への取次ぎを依頼している。騒動後「恩賜館組」の宮島綱男教授が罷免されると、大山は抗議して辞任している。

大浜信泉『総長十二年の歩み』校倉書房 一九六八年

早稲田大学大学史資料センター所蔵

後の第七代早稲田大学総長で、戦後の大学経営を担った大浜信泉は早稲田騒動当時法科学生。早稲田騒動では教員・校友・学生が対立する中、大浜は弁護士試験を控えており、学業を優先して武州御嶽の神官の家で法律書を読んでいたという。騒動における学業優先・静観型の学生の対応として興味深い。

早稲田大学軍事研究団『我等も国防へ』一九二四年

早稲田大学図書館所蔵

早稲田大学軍事研究団による同団設立の趣旨や活動をまとめたもの。冒頭の宣誓文によれば「国防に当り以て国体の精華を発揚し国民の使命を達成する」ことは早稲田大学教旨にうたう「模範国民の造就」にかなうこととされ、学業の余暇に軍事を研究することの必要性を主張している。

若津一夢「早稲田の滅茶苦茶演説会」『雄弁』一九二三年七月号

早稲田大学図書館所蔵

雑誌『雄弁』による軍事研究団発会式当日を報じた記事。軍事研究団に反対する学生の野次怒号が記録されている。反対派の学生にとって、軍事研究団の容認は軍閥と握手することであり、早稲田の精神にもとる行為とみなされた。

「銅像前で大乱闘を演ず 早大学生大会暴行に終る」

早稲田大学大学史資料センター所蔵

五月十二日の学生大会の模様を記した縦横倶楽部会長森伝の原稿。軍事研究団賛成派の学生と雄弁会を中心とする反対派の学生の激しい対立の模様がわかる。当時浅沼稻次郎は反軍事研究団側の雄弁会の中心として奮闘し、この学生大会の対立の中で負傷している。

浅沼稻次郎直筆原稿「早稲田の野党精神」一九六〇年

早稲田大学大学史資料センター所蔵

日本社会党書記長・委員長をつとめた浅沼稻次郎が一九六〇（昭和三五）年に執筆した直筆原稿。日本社会党野紙に早稲田大学在学中の学生社会運動について論じており、軍事研究団事件について詳細に記している。当時浅沼は雄弁会で軍事研究団に対する反対派として活動した。